

Title	福武直編 アメリカ村
Sub Title	T. Fukutake, ed. "Influences of emigrants on the home village."
Author	青沼, 吉松
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.12 (1953. 12) ,p.1051(83)- 1055(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19531201-0083
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531201-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料を基礎として検討する。

第六章「交通資本の蓄積」は、この書全體の結論である。「交通資本も一の産業資本として——何故ならそれはその轉形のうち生産資本の形態をとるから——その蓄積法則に従う。すなわち、個別資本としての集積の基礎をなす利潤の源泉を、一般の産業資本と同じように、何よりもまず生産過程の内部に」もつ。この生産過程の分析にあつては、交通用役の生産が需要によつてその作業が直接に制約される面が強いこと、また近代的交通業は各種の産業中であつて特に巨大な資本單位と高度の資本の有機的組成を以て特色とすることなどについて注目され、これ等の面から交通資本の蓄積が究明される。次に、交通業が生産し販賣する商品が一の即時財であり、そこでその資本の循環が通例の $G-W:P:W'-G'$ ではなく、 $G-W:P:G'$ という、生産資本としては特殊な形をとることからしても、その流通過程の分析がまた重要である。兩過程を總括して、交通資本の蓄積について論ぜられる。

さて「交通は、商品輸送についていうと、商品流通の空間的擔い手であり、従つて商品經濟の發達程度或いは經濟的發展段階の一つの綜合的表現である。それは一國における社會的分業……の程度によつて規定せられるところの市場の深さと廣さとを、輸送される商品の種類と量及び輸送距離によつて表わす。」この様な「市場展開と交通」との關連が論ぜられた後で「國家と交通資本」が、續いて交通資本の「集積と集中」が考察さ

れ、この最後の節が結論中の結論を形成する。卷末に附録として交通年表及び交通生産力指標が附される。

(2)

この様に、この書は「交通における資本主義の發展」を「日本交通業の近代化過程」(副題)の分析を通じて追究したものである。著者のこの問題についての見解は、部分的には、既に發表されている幾つかの論文を通じて明らかにされているところであつたが、この書はそれ等を集大成しさらに補完して、しかも理論的に透き間のない組立てを持つようにならめ上げていく。著者はまた、その所論を裏づけのにきわめて豊富な資料のきわめて適切な驅使をもつてしており、われわれはこの書によつて、この問題に關する鮮明な繪圖を興えられる。これまでも、科學的勞作によつて開拓されることのはなはだ少なかつた分野であるだけに、この勞作が一層評價されねばならないわけである。

勿論、この書がさらにつけ加えられるべきものを持たぬといふことは出来ないであらう。著者自身によつて述べられているように敘述必ずしも精粗一樣でないことは、將來さらに加筆されるべき個所の存在が示されているわけであるし、また「日本資本主義の發展と交通におけるそれとの有機的な絡み合いの析出に不手際」(序)という謙遜の言葉も、ある一部の讀者にとつては肯かれるところがあるに違いない。しかし、ひるがえつて

考えるのに、これ等の諸點は一面また本書の特徴とも關連するものである。資料をゆるがせにしない著者の態度は、根據のある資料の缺けている部面について懸々しく判断を下すことを許さないものであるし、またたとえ、日本における交通發達に見られる特殊性をすべて「日本資本主義發展の構造的性質が制約した」というきまり文句で以て説明し去るの蠻勇を、この著者は持ち合わせていない。資料を踏みしめて一步一步をきわめながら進んで行くという敘述は、すべてを割り切つた結論を直ちに期待する性急な讀者にとつては、あるいは「手ぬるい」感じを興えることあるうけれども、このような堅實な行き方こそが實は本書の本領であると思われる。

本書によつて興味を唆られた讀者は、著者がその理論の一端を展開している論文「交通労働の生産性」(經濟學雜誌、一九四八年七月號)を併せ参照するのがよいであらうし、また中央大學經濟・商業學會の發行にかかる經商論第五〇號(一九五三年七月號)所載の、大島藤太郎氏による本書の(簡単にしてしかも鋭い)批評を一讀することもよい參考とならう。(本書は一九五三年一月、岩波書店刊、A5版、四〇六頁、五五〇圓)

(一九五三——一〇——二六)

福武直編

「アメリカ村」

青沼吉松

「アメリカ村」という通稱をもつ和歌山縣日高郡三尾村は、その世帯数の約四分の三が海外移民に關係している「日本一の移民送出村」である。この村が日本における移民送出村の典型的事例——この事例が典型的であることの實證はこの著書のなかでは殆んど展開されていないが——としてとりあげられる。そのインテンシブな實態調査を通して、日本における従来の移民「出稼型」海外移民が母村に及ぼした影響」を解明することに「將來の移民問題に備える科學的參考資料の一つをつくりあげよう」とするのが、本書の研究目的である。

この研究では歴史、人口、漁業、農業、村落、家族、教育、宗教、公衆衛生、世論等の諸項目が、主に社會科學の各分野の専門家によつて分擔されている。これらがほほ有機的連關を保ちつつ、單一の主題「移民の母村に及ぼした影響」をめぐる展開されている。諸専門分野の協力による研究がなされても、ややともすると並列的な研究に終り勝ちであるにも拘らず、それがここではかなり綜合的な成果をあげている。「わが國でも最初の綜合調査であるといつてもよいであらう」という自負は、「より綜合的であり、より廣い分野の協力によつた調査」であると

いうことを意味している。かかる業績が比較的若い研究者によつて、しかも比較的短期間にそれ程多額とはいえない資金を以てあげられたということは、注目されてよいであろう。敘述に若干の重複があり、なかには統一の缺如を物語るかのものさえないではない。更に重要な項目が軽く扱われ、些末と思われることに多くの紙面が費されているのではないかと思われるところもある。編集者が後で斧鉞を加えれば、これらの點の大部分はおそらく解消されたのではないだろうか。綜合性を強化しようとするならば、この處置が必要だつたのではないか。しかし各専門家が協同して、単一の主題に立ち向うという研究方向への寄與は、高く評價されなくてはなるまい。各専門分野が各の學科の境界線について論争するよりも、協力して現實を説明することの方が遙かに賢明である。各學科の差別はその研究對象にではなくて、その方法においてみられる限り、同一對象を種々なる角度からみる事が可能である。このような綜合的研究は、學問が實踐と結合するための不可欠な條件である。

三尾村の劣悪な自然的條件とそれに不相應な過剰人口に起因する生活の困窮からの脱出が、カナダへの移民という形をとつた。移民の動機となつた社會・經濟的原因は、自然と人口とのこの矛盾を無視しては理解しえない。本村はその三方に山を負い、南は海に面している。山が比較的海岸にまでせまつていて、ために、耕地は狭少であり、しかも風害、潮害をうけるので、收穫は不安定である。かかるところでは農業のみによつて生活

の資をうることは困難であり、従来から漁業により多く依存してきた。この村の産業としては漁・農以外にみるべきものはない。しかし漁村としての立地條件でも決して恵まれてはいない。沿岸には岩礁があり、地曳網には適しないし、港灣は浪が荒く、大型漁船の碇泊を許さない。それでも明治前半は漁業がかなり盛んであり、何とか生計をたててきた。ところが明治二〇年前後に打瀬網漁場を實力的に他所に奪い取られてからは、村は窮迫の一端を辿つた。この窮乏の村から飢餓流出として移民が出されたのは、この時期からであつた。村民をカナダにまでかりたてた資源貧弱な村と比べれば、彼地は彼らにとつて「働くもの天國」であつた。

自然と人口との不均衡はわが國ではむしろ普遍的現象である。過剰人口は階層の兩極的分化と相俟つて、低賃銀労働者として現象することがある。九十九里濱揚繰網漁業においては漁港の缺如というような自然的悪條件が、この低賃銀労働力によつて一應克服されている。九十九里濱揚繰網漁業については拙著「漁村社會の構造」(社會學評論第十三號所載豫定)参照)九十九里濱で揚繰網漁業が成立しているのは、そこでは三尾村にあつたような困窮からの廣い脱路(海外移民がないということ)によるところが大である。本村の地主(網元經營の大規模沿岸漁業)打瀬網漁業の破綻は漁場の沖合化にもよるが、それを促進したのは移民による基幹労働力の喪失である。更にこの労働力の不足はこの村に大規模沖合漁業(巾着網漁業)が根を下ろすた

めに極めて不利な條件となつた。漁業の不調が移民を導いたが、後者が逆に前者を助長するという循環がみられる。村民がカナダに移民し、そのの確請資本の實質的賃銀労働者となることにより、地元での漁業の資本家的經營は阻止されたわけである。

九十九里濱での如く沿岸漁業から沖合漁業への轉換は、三尾村では成功しなかつた。この轉換を阻んだ要因は、同村の壓倒的に多數の人々に對してはむしろ有利に作用した。移民の多くは彼地で漁業に従事し、「肉體的労働をとまなう被使用者の地位」にとどまり、そこで最下層を形成していたが、それでも彼らの經濟的収入はわが國の中小企業における漁業労働者の水準を遙かに越えていたであろう。九十九里濱漁民の陋屋と三尾村での立派な家屋との對比は、このことを實證している。「漁業や農業の生産が停滞したことや村人の政治的關心が弱くならざるをえなかつた點など」、「現在では移民の悪い面のみが目立つている」としても、移民による影響の悪い面を強調しすぎると、片手落ちになる。この強調は現在同村が直面している問題を鮮明にするのには役立つだろう。しかし移民による脱出が行われな場合、同村がとつたであろうコースと比較して、移民によつて回避しえた事態を明らかにすることも大切である。これは移民の有無においてのみ相異し、その他の條件のほぼ等しい地域との比較研究によつて遂行されよう。

頁數五百を越える本書において多數の分擔研究者が、多面的な觀點から「海外移民の母村に及ぼした影響」を究明してい

る。しかしこの影響の骨子としてとりあげられている或いはとりあげらるべきであるのは、移民の出稼の性格の故に生ずる移民先と母村の緊密な有機的關係及びこれによる母村の寄生化である。従つてこの關係の切斷乃至は稀薄化は、母村の生活に深刻な危機を齎らす。分擔執筆者のイニシヤティブを尊重する故か、この骨子は本書のなかで筋を通して、強調されているとは必ずしもいえないようにもみえる。これをはつきりと浮彫にしてみよう。

従來の日本移民の多くがそうであつたように、本村の移民も出稼の腰掛主義に立脚してなされた。彼らにとつては「できるだけ早く、多くの金を儲けて歸國することが目的であつた」。カナダ西海岸に漁業移民として出ていく村民は、東北農村から北海道漁場に出稼く季節労働者と相似た態度をもつていた。「漸次働けるだけ彼地で働こうとして移民するようになり」、妻子をつれていくようになったが、永住する意志のない限り「故郷に歸を飾る」ことをめざしていた。移民にとつての窮極の目的は歸村してからの階層的上昇にあるから、主として財産關係を基準とする三尾村の階層構成に移民が與えた影響が問題となる。移民による母村での地位の向上は限られており、「舊來の最上層の地位を下降させるほどの移民の影響はなかつた」。これは移民の彼地での地位の低さを反映している。しかし移民のうちの一應の成功者は上層に位置しており、移民關係世帯の多くは中層にある。移民の多くは中下層から流出したことを考慮に入れる

と、多くの人々は移民によつて多少の階層の上昇を達成しえたようである。若し移民が行われなかつたとするならば、この村は多数の下層の家をもちつづけるどころか、階層の兩極的分化が促進されたであろう。移民は階層構造の傾斜を緩和させるのに役立つたようである。九十九里におけるような網元と船方との著しい貧富の懸隔は、ここではみられない。

移民は出稼労働者の性格をもち、かつ彼地では封鎖的な日本人社會を形成していたから、彼地の文化の攝取は低度に行われなかつた。従つて移民の影響は衣・食・住の外面的な形態には表れたが、生産の仕組、政治の方式、ましてや思考様式にまでは浸透しえなかつた。即ちアメリカ化は外形的には若干進められたが、内面的な人間類型を變えるまでには至らなかつた。本質的には、三尾村はわが國一般の農・漁村とちがわなれない。この理由からして、文化傳播の問題よりも、むしろ移民先と母村との經濟的依存關係——附隨的には、この關係を補強する姻戚を含めての近親集團の機能等——をより一層重視すべきではなかつたろうか。

「山から俯瞰すると、かなり立派な日本家屋が屋根をならべて富裕さを豫想させるが、耕地のせまさと工場もみられない景觀と思ひあわせて、知らない人は不思議な感をいだくであろう」。この疑念は本村の經濟的支柱がカナダにあるということを理解することによつてとける。「紀州のアメリカ村」は「カナダの三尾村」と有機的に結合している。母村は隱居、子女の養育の場

所であり、カナダは生産的活動の場面である。移民による經濟的援助が母村の消費生活を可能にして、それに寄生的性格を刻みつけた。母村での生産的活動は移民からとり残された人々、それからの仕送りに依存している老人、子供の仕事にしかすぎなかつた。「被扶養年齢層就中老年層の高比重と生産年齢層の過少」という母村の人口構成、「カナダ三尾村」での逆のそれは兩者のこのような關連を裏付けている。移民は一方では母村を「隱居村」にしたから、その積極的な發展に努めようとせず、他方ではカナダに資本に勤勉な、ストライキ破りさえもする低賃銀労働力を提供したが、そこでの完全な市民にはなれなかつた。一定の地域に根を下ろして、そこでの生活を積極的に充實せしめようとする氣持は、彼らの間には生れてこなかつた。彼らはいはば「根なし草」となつた。

海外移民による生産年齢層の流出を補うために、三尾村への内地移民が必要とされた。「傳統的地盤をもつ農家世帯が主として縁故關係にたよる移民に有利な地位を保つてきた」が、移民が出稼という形でなされたので、その土地は賣られず、小作に出された。小作人として入つてきたのは、附近の農・山村の過剩人口、農家の次三男であつた。かくて渡航者、零細土地所有者と入り人との間に、自・小作關係が成立する。かつて小作がみられなかつた本村で、移民の増加につれて小作制度が發達し、戦前には農地の八割は小作人の手で耕作されていた。従つて入り人が本村の農業生産の中心となつた。この事實はカナ

ダへの經濟的依存と共に、本村民の寄生的性格を強化した。なお村民が入りに對してもつた差別感が、彼らがカナダで遭遇した人種的偏見に對應するかにみえるのは皮肉である。

本村はその寄生的性格の故に「カナダ三尾村」との有機的關係の切斷によつて致命的な打撃を蒙る。太平洋戦争の勃發に伴う送金の途絶は、これまでの村の生活様式を根底から破壊した。かつては大した重要性をもたなかつた農・漁収入の比重が、増加せざるをえなくなる。農地を小作人からとりあげて自作し、漁業に懸命に従事することによつて生計をはかるように努めなくてはならなくなつた。窮境は戦後のカナダからの多数の引揚者によつて更に深められた。家屋は依然として立派であるが、生活はアメリカ村直前の極貧な状態に逆行した。

やがて送金の復活、二世の再渡加の實現によつて窮境は若干緩和されたが、「今なお村の經濟は一般に乏しい」。既に二・三世に交代しつつある移民先よりの仕送りに今日より多くを期待することが困難であり、移民に對する制限によつて渡加しよう人は限定されている。村の最大の産業である漁業による収入も、大部分の村人にとつては家計補助以上の意味をもちえない。村内で生活の道を見出しえない人々は、脱路を京阪神への出稼、巾着網船への乗組に求めている。過重な扶養人口をかかえている村の現状は苦しい。村人の過半数はこの村をよくしようにもできないと考へ、この資源貧弱な村を見捨てている。若い者の眼はアメリカに向いている。困窮からの脱路を外部に求

めている場合には、協力による内部の改革に無關心になるのは當然である。

戦後において移民の態度は、出稼から永住に變つてきている。このことは三尾村の將來に深刻な問題を投げかける。移民が出稼的性格をもち、彼地に同化しえなかつた理由の若干は除去された。例えば「根なし草」としての出稼移民を正當化していた故國への感情的依存は、大日本帝國の崩壊と共に困難になつた。この感情的依存を助成する人種的偏見に基づく差別は、緩和される傾向にある。彼地への適應が圓滑になるにつれて、故里とのつながりは稀薄化する。出稼から永住への移行は、三尾村からその寄生化の基盤を奪う。本村が海外移民を出さなかつたわが國の大部分の農・漁村に對してもつていた特權的地位を基礎づける地盤は、崩壊にさらされている。移民の性格の變化は、母村に残された人々が眞剣に村の、そしてわが國の現實に立ち向わざるをえなくする。自然的條件の劣悪に伴う過剩人口の問題はこの村だけではなく、全體として日本の事態である。そして移民がこの問題の解決のために果たす役割をそんなに大きく見積りえない限り、われわれはどうしてもこの苛酷な現實から逃避することはできない。本書は海外移民の問題を通して、露呈してくる基本的事實にまでは筆を進めてはいない。(本書は一九五三年三月、東京大學出版會刊、A5版、五四四頁八〇〇圓)